グリーン交悠録

ゴルフは自己責任と自分との戦い

読売広告社執行役員　**宇野光一**さん

大洗ゴルフ倶楽部

インタターネットとどう向き合うかが業界の課題

大中：宇野さんとの出会いは、小島伸浩氏からのご紹介でしたね。

宇野：そうですね。もう何年になりますか。確か学生援護会のロジスティックス関連企業の社長さんだったと思います。

大中：小島氏から「私の友人で宇野と言う人がいるからぜひ会ってほしい」と言われ、どんな人物かと品定めしたんですね（笑）。

宇野：いわゆる面接ですね（笑）。

大中：時間がなくて3分でOKとなりました。宇野さんのお人柄は小島氏の折り紙つきそのものでした。

宇野：いや、恐縮です（笑）。面接会場は確か銀座1丁目のバーでしたね。

大中：お互いに戌年だったという点も高評価でしたよ。なので「戌年会」にも入って頂き、さまざまなゴルフ会へのお誘いにも応えて頂いていますね。

宇野：いろいろとお世話になっております。

大中：ところで、御社は創業何年になりますか。

宇野：読売広告社は昨年創業70周年を迎えました。

大中：読売広告と言えば、黒木元社長を思い出しますが、黒木さんは何代目ですか。

宇野：5代目くらいではないでしょうか。

大中：あなたの仲人も読売広告社の社長でしたね。

宇野：そうです。小池克彦さんです。同じ会社の近い部署でした。実は、私の妻が小池さんに可愛がって頂いていて「そろそろ結婚を考えろ」と言われたのがきっかけです。

大中：ほう、社内結婚ですか。それで、入社何年目になりますか。

宇野：32年になります。会社は現在の博報堂・大広と統合して15年になります。私も来年1月には還暦です。

大中：ところで、不動産業や東南アジア情勢にも詳しい「宇野情報」ですが、本業である広告業界の現状はどうですか。

宇野：そうですね、インターネットの進行で、旧来型の新聞など、今後一定の統廃合はあると思います。

新聞は編集の機能は残りますが、「宅配で配信」「紙で見る」は変化するでしょう。

大中：しかし、新聞は商売の兼ね合いから、まだ使っているのですか。

宇野：使ってはいますが、厳しい状況で、電波の方が圧倒的に大きいです。電波だけは許認可事業ですから。但し、ネットでも映像が視聴できますので、テレビ広告対動画広告のような構造に変わって来ています。ネットの広告費が現在は25％程度ですが、多分あと10年で半・半になるのではないかと予想されています。

大中：すると、広告代理店としての生き残り策はどうでしょう。

宇野：携帯電話、スマホへの対応でしょう。実は今、面白い状況が起こっているのです。現在の学生はPCを使った経験がなく、いきなりスマホです。これまでの団塊の世代は、仕事をPCで処理する最初の時代の人達です。すると、後10年も経つと、世の中のほとんど総ての人が、ウェブに慣れた人間という時代に入ります。インターネットとどう向き合うのか、が我が業界の課題でしょうか。

大中：ところで、ゴルフは誰から教わりましたか。

宇野：父親です。クラブを握ったのは高校生の時で、ラウンドに出るまでの練習は5回ぐらいでした。母親の方が上手だったので、親子3人で

初ラウンドでした。

大中：最初のスコアは覚えていますか。

宇野：よく覚えていませんが、恐らく120位だったと思いますよ。

大中：ほお、それは素晴らしい。もしかして宇野さんの場合は、OBが多かったのではありませんか。

宇野：そのとおり、OBだらけです（笑）。

大中：でも、今は飛ばしてますよね。ドライバーの飛距離はどの位ですか。

宇野：今は約220ヤードですが、最高は260ヤード程です。

大中：最高はいつ頃ですか。

宇野：10年程前ですが、50歳を過ぎてからどんどん落ちていますね。

大中：この間、梅里カントリークラブで2オンした時は、270ヤードくらいでしたか。あのコースはロングですから470ヤードくらいですね。

宇野：そうですね。第2打はスプーンでイーグル狙いだったのですが、打ち過ぎて一番上まで行ってしまいました。お恥ずかしい話で……。

大中：あれは宇野さんとの思い出で一番忘れられないハプニングでしたよ。しかし決戦には強いですよね。

宇野：そうですね、「勝負は強いが、心は弱い」です。

大中：ホールインワンの経験は。

宇野：40歳の時に1度だけあります。仲間と北海道のルスツリゾートで、しかもノーキャディでした。3日間ゴルフ合宿をして、1日2・5ラウンド周った時です。

ストイックなゴルフもあり、健康に良いゴルフも良し

大中：いずれにしても、ゴルフは大いに楽しまなくてはいけません。かつて富士ゼロックスの小林陽太郎さんと周りましたが、小林さんは楽しんでおられませんでした。

宇野：どうしてですか。

大中：非常にストイックなゴルフで、毎回30台を望んでいるのです。ハンディは最高で3だったと思います。

宇野：凄いですね。

大中：納得しないと、プレイが終わっても19番ホールには行かず、そのまま練習場に直行です。その間私達は風呂で汗を流し、ビールを飲んで談笑していると、暫くして小林さんが一転健やかな顔でやって来るんです。チェックポイントを全部復習し、18番の失敗を全部体に思い込ませて来るんですね。

宇野：素晴らしいですね。なかなかできることではありません。

大中：だから上手くなるんです。これからは19番ホールで飲んでいないで、お風呂もやめて練習すれば、シングルになれますよ（笑）。

宇野：耳が痛いです（笑）。私も練習に行かなければだめですね。

大中：現在、ハンディはどれくらいですか。

宇野：17です。もうなくなってありませんが、茨城県の某ゴルフ場で取りました。

大中：では最高のスコアはどれくらいですか。

宇野：たしか39・37の76だと思います。50歳の頃、レイクランドカントリークラブで、オンワードさん主催のコンペの時でした。

大中：その後の成績はどうですか。

宇野：全然駄目ですね、先日は遂に100叩きの刑になりました。

大中：でもゴルフには「沢山打って健康に良し、少なく打って気持ち良し」という格言がありますからね。

宇野：なるほど、素晴らしい言葉ですねえ。

大中：宇野さんはパットもアプローチも上手いですからね。

宇野：いえ、パットはそこそこですが、アプローチは悲しいものですよ。

大中：私は午前中のプレイが終わると、午後は運動に切り替えて楽しむようにしています。宇野さんは長いパットをさらりと入れますよね。

私が師匠と仰ぐアーノルド・パーマーは、下から転がるとラインが出るので「ボールの行き先をしっかり見なさい。そこを辿れば入るんだから」と。そして「ショートパットは、朝から晩までやっても永久に入らない」とも言っていました。

上りは30㎝オーバー気味、下りは3分の1が最高だそうです。

宇野：なるほど。勉強になります。

大中：最後になりましたが、宇野さんにとってゴルフとは？

宇野：ゴルフを永くやって分かったことは「自己責任と自分との戦い」ということです。ある人はミスショットを「待ち」や「寒さ」「暑さ」を理由にします。探せば100の理由がありますが、常に向き合うのは目の前にある1つのボール。

ゴルフをとおして自分を見つめることで、人生を幅広く厚くしてくれたと思います。